

名詞連語の語順と日本語訳について

高橋弥守彦 (大東文化大学名誉教授)

Concerning Word Order in Noun Collocation and Japanese Translation

Yasuhiko TAKAHASHI

内容提要

原则上, 名词短语“修饰语 + 的 + 被修饰语”中的核心部分(被修饰语)为名词, 修饰其核心部分的语句(修饰语)为定语。当修饰语为一个单词时, 一般不会发生语序上的问题, 例如“北方的冬天”[北国の冬は/北国は冬の訪れが]。但是如果修饰语是两个以上的单词的话, 对我们外国人来说, 语序就会成为问题, 例如“他那刚刚出世不久的儿子”[生まれて間もない赤ん坊]、“这对拥抱着的父子”[抱き合った父子]。

本文从短语论的观点出发, 探讨修饰语为两个以上单词的情况时, 需要遵循“关联性结构关系 + 规定性结构关系 + 的 + 名词”的语序原则, 并进一步阐明名词短语的核心部分不是名词而是用言性词语时, 例如“一个小小的欺骗”[小さな小さなウソ]、“一刹那的惊愕”[一瞬の驚き], 为什么动词、形容词及其短语形式均可成为名词短语的核心部分? 与其相对应的日语译文又有怎样的规律可循呢?

キーワード: 名詞連語 カザラレ カザリ 関係的なむすびつき 規定的なむすびつき

目次

0. はじめに
1. 名詞連語の核 (カザラレ)
2. 名詞連語の限定語 (カザリ)
3. おわりに

0. はじめに

連語論の観点からみれば、名詞連語「カザリ+“的”+カザラレ」の核(カザラレ)は、一般には名詞“姑娘”(例1)や“孩子”(例2)などの体言性の単語だが、動詞“学习”(例2)や形容詞“惊愕”(例3)など用言性の語句の場合もある。用言性の語句がなぜ名詞連語の核となれるのだろうか。不思議な言語現象である。また、短い連語で作る限定語(カザリ)“车间里、个懂事”(例1、2)であれば、語順の問題はほとんど発生しないが、いくつかの単語が組み合わさり“船舱里三个年迈”(例4)のように長くなると、どのような語順になっているのか、それをどのように訳すのか、という問題が生じる。外国人にとって、これはかなり難しい問題となる。

- (1) 她自己呢? 依然是单身一人。28岁了, 车间里的姑娘都说她有点儿怪, 有点儿冷。(『人民』96-11-85)

だが彼女自身はというと、依然として独身で、もう二十八歳だった。職場の小娘たちは、陰で彼女のことをどこか変わった、冷たい女だと噂した。(同上、96-11-84)

- (2) 元元知道为自己的学习, 爸爸什么都豁得出来。元元是个懂事的孩子, 一想到这就心酸, 眼泪直往心里流。(『人民』97-2-87)

自分の勉強のためならどんな犠牲も厭わないという父親のようすに、元元は胸のうちに涙を流した。(同上)

- (3) 老二、老三也只是一刹那的惊愕。三双老手一同抹去两张脸上的泪, 三双老手一同把两个跪着的人掀下了海, 再同喊一声: “回去吧——鸽子。你们……”(『人民』93-4-111)
弟二人は一瞬はっとしたが、三人の老人の手はいっしょに動いて、若い二人の涙を拭ってやり、ひざまずいている二人を海に落とす。それからまた声を合わせて叫んだ。「帰って行きな——鸽子。お前たち……」(同上、93-4-110~111)

- (4) 船舱里三个年迈的渔夫铁青着脸, 无声地抽烟; 阿根和鸽子坐在船板上, 互相用眼睛传递着惶惑。(『人民』93-4-111)

船室では三人の老いた漁師が青黒い顔をして黙々とタバコを吸っている。阿根と鸽子は船板に腰かけて不安の目を見かわしている。(同上、93-4-110)

本稿では、これらの問題を明らかにするため、連語論の観点から、名詞連語の構造を「カザリ(限定語)+“的”+カザラレ(名詞連語の核)」に分け、以下に挙げる名詞連語の核と中国語の限定語の構造及び日本語訳の3点について、先行研究と短編小説に用いられている実例に基づいて検討する。

① 名詞連語の核となる単語¹⁾ および連語の検討

¹⁾ 名詞連語の核は、名詞や名詞連語の場合が多いが、以下の例にみられるように、まれに体言性の代詞“他”の場合もある。

她不顾一切地赶往出事地点。在县医院里, 她见到了不省人事的他。(『人民』96-11-85)

彼女は人目も恐れず事故が起こった町にかけつけたが、県病院で彼女を待っていた彼はすでに意識不明だった。(同上、96-11-84)

- ② 多項性限定語を作る語順の分析
- ③ 名詞連語における日本語訳の検討

1. 名詞連語の核 (カザラレ)

一般的に言えば、下記例 (5) (6) に見られるように、名詞連語“北方的冬天”“元元的作业”の核は、名詞“冬天”“作业”である。場合によっては、例 (7) (8) に見られるように、名詞連語“个远近闻名的国医大夫”“她的地址和姓名”の核が名詞ではなく、また名詞連語“国医大夫”“地址和姓名”²⁾ の場合もある。

- (5) 北方的冬天来得早。(『人民』97 - 2 - 87)
北国は冬の訪れが早い。(同上)
- (6) 对一个观棋的中年男子说：“走吧！元元的作业写完了。”(『人民』97 - 2 - 87)
将棋を見ていた一人の中年男性の肩にそっと掛けながら言った。「あなた、もういいわよ、元元の宿題終わったわ」(同上、97 - 2 - 86)
- (7) 老爷子那辈是个远近闻名的国医大夫。(『人民』94 - 10 - 97)
おじいさまの代は有名な中医だった。(同上、94 - 10 - 96)
- (8) 医生们把她当成他的配偶，因为昏迷前他仅仅说出她的地址和姓名。(『人民』96 - 11 - 85)
医者たちは彼女を彼の奥さんだと思った。というのも、昏睡状態に入る前に彼がか細い声で告げたのが彼女の名前と住所だったのだ。(同上、96-11-84)

上掲4例に見られるように、名詞連語の核は一般的に言えば、名詞“冬天、作业”(例5, 6) または名詞連語“国医大夫、地址和姓名”(例7, 8)などの体言性の語句である。主に名詞などの体言性の語句が核となっているので、名詞連語と名付けられている。

名詞連語の核(カザラレ)が例(7)(8)のように名詞連語“国医大夫、地址和姓名”であっても、一般的には累加式の2単語“国医大夫”[“国医+大夫”]か、並列式の3単語“地址和姓名”[“地址+和+姓名”]が多く、さほど複雑な構造ではない。そのため、名詞連語の核の語順も習わし訳以外の日本語訳もほとんど問題とならない。しかし、以下の実例にみられるように、名詞連語の核に動詞や形容詞など用言性の語句が用いられる場合³⁾もある。ここには、本来、名詞連語の核は体言性の語句のはずなのに、なぜ用言性の語句が名詞連語の核⁴⁾となれるのかの問題がある。

- (9) 满足的笑, 苍老的笑, 豪迈的笑! (『人民』93 - 4 - 111)
老いた三人の、満足し切った笑い、枯れた笑い、豪邁な笑い! (同上)

²⁾ 名詞連語の核は、以下の実例のように数詞や量詞が加わる場合“一所大学”もある。

吕月没毕业就考上了美国的一所大学，当然还是学医。(『人民』94 - 10 - 97)

吕月は、大学卒業前にアメリカのさる大学に受かった。(同上)

- (10) 这个城市不再有他的身影、她的寄托了。(『人民』96 - 11 - 85)
彼がいなくなったこの町に、もはや自分の寄る辺はない。(同上)
- (11) 领导们更是爱他的老实。(『人民』89 - 1 - 101)
上役たちはよりいっそう彼のおとなしいのが気に入っている。(同上、89 - 1 - 102)
- (12) 娘啊！你太苦了，过度的劳累让你一个四十多岁的女人变成仿佛六十老奴。(『人民』97 - 5 - 87)
母さん、ご苦労だなあ！仕事のしすぎでまだ四十なのに、もう六十の婆さんに見えるよ。(同上、97 - 5 - 86)
- (13) 但是，她想到他的临终嘱托。(『人民』96 - 11 - 85)
だが、彼女はいまわの際に彼から頼まれたことを思い出した。(同上)
- (14) 他们要她坚强，要她作好最后的思想准备。(『人民』96 - 11 - 85)
心を強くして、最期を覚悟して下さいと医者がいった。(同上、96-11-84)

名詞連語の核は、一般には例(5)から(8)にみられるように、名詞“冬天、作业”または名詞連語“国医大夫、地址和姓名”など体言性の語句である。しかし、上掲の名詞連語の核は、例(9)(10)が動詞“笑、寄托”、例(11)(12)が形容詞“老实、劳累”、例(13)(14)が動詞連語“临终嘱托、思想准备”であり、用言性の語句が名詞連語の核となっている。これらはそう多くはないが、中国語ではまれにみられる言語事実である。

名詞連語の核は上掲で説明するように、体言性の語句が一般的である。しかし、上掲の実例が示すように、動詞や形容詞およびそれらで作る用言性の連語であっても、名詞連語の核になれる。これは形態変化に欠ける中国語の特徴であり、筆者の唱える枠組み理論⁵⁾によって、それが可能であることを明らかにできる。

日本語は連語論の観点からみると、主要な3品詞(名詞、動詞、形容詞)に形態変化があるので、品詞の転成が比較的簡単である。しかし、中国語は形態変化が発達していないので、名詞の核に動詞や形容詞あるいはそれらで作る連語が用いられても、枠組みの持つ文法的な機能により、名詞連語の核となる用言性の語句に体言的な意味が加わり、それらの動詞や形容詞などは、連語レベルで

³⁾ 用言性の語句がなぜ主語や客語になれるかについて、張之公は“名物化”、朱德熙は“本能説”、沈家煊は“包含模式理論”により、この問題に言及している。

结束，意味着新的开始。(『人民』88 - 8 - 101)

終わってことは、新しい生活のスタートってことさ。(同上)

⁴⁾ 高橋弥守彦(2017: 14~16)の唱える枠組み理論とは、名詞連語の核は、一般に体言性の語句だが、動詞や形容詞など用言性の語句の場合もある。これらの用言性の語句を名詞連語の核の位置に用いると、名詞連語の核に本来有する体言性の機能が加わり、これらの用言性の語句は転成名詞や転成名詞連語になる、という理論である。

⁵⁾ 高橋弥守彦(2017: 14~16)の唱える枠組み理論とは、動詞や形容詞およびそれらで作る連語が主語になれ、名詞や名詞連語が述語になれる文の分析である。

静也是一种作用力，静得让人心烦，让人摸不着头脑。(『人民』97 - 5 - 99)

静寂にも、一種の力がある。人の心を乱し、途方に暮れさせる。(同上、97-5-98)

文法的に転成名詞や転成名詞連語となる。この文法的な機能により、それらは名詞連語の核となる。これにより、中国語は文法的な機能が発達した言語であると言える。これは形態変化の発達していない中国語の特徴の一つである。

具体的に言えば、上掲の“笑、寄托”は、単語レベルで見れば動詞だが、名詞連語の枠組み“満足的笑、她的寄托”のなかで見れば、“笑、寄托”は、一般的な名詞連語を作る核の有する機能により、体言的な意味が加わり転成名詞として機能している、という理論である。同様に名詞連語“他的临终嘱托”“最后的思想准备”における“临终嘱托”“思想准备”のような用言性の語句が名詞連語の核となる場合も同様である。

2. 名詞連語の限定語（カザリ）

名詞連語のカザリとなる限定語は単語または連語からなっている。二つ以上の語句からなる場合を多項性限定語という。連語になると、多項性限定語には累加式もあり並列式もあり、かなり複雑な構造の限定語から作られる語順となる。しかし、一つの単語や連語が限定語になっている場合の構造は簡単である。

2.1. 一つの単語や連語からなる簡単な構造の限定語（カザリ）

名詞連語の構造は原則として「限定語（カザリ）＋“的”＋核となる語句（カザラレ）⁶⁾」である。核となる語句（カザラレ）は、よく中心語ともいわれる。以下では、限定語（カザリ）が一単語の場合から見ている

- (15) 鸽子的变化使他目眩，使他恐慌。（『人民』93 - 4 - 111）
 鸽子的变化に爺さんはうろたえた。（同上、93 - 4 - 110）
- (16) “是我。”一只有力的大手握住了她的手。（『人民』91 - 2 - 96）
 「おれだよ」力のある大きな手が、彼女の手を握った。（同上、91 - 2 - 97）
- (17) 当她把落水的孩子托到岸边时，失去知觉的她又倒向河中……（『人民』91 - 2 - 96）
 川に落ちた子供を岸边まで運んでくると、知覚を失った彼女は水中に倒れ……（同上、91 - 2 - 97）
- (18) 宁静的海天，静穆的云帆。（『人民』93 - 4 - 111）
 静かな海、大きい帆。（同上、93 - 4 - 110）

例（15）は名詞“鸽子”、例（16）は代詞“她”、例（17）は動詞“落水”、例（18）は形容詞“宁静、静穆”がそれぞれカザリとなっている場合である。これらは一単語が限定語となる場合なので、語順の問題は発生しない。

⁶⁾ 名詞連語は一般にはカザリとカザラレの間に構造助詞“的”を用いるが、“那朵小黄花”“他那本小说”のように構造助詞“的”を用いない場合もある。

以下では一つの連語がカザリとなっている実例を見てみよう。カザリが連語であっても、固定連語および体言や用言だけの累加式や並列式の名詞連語であれば、単語が飾りとなる名詞連語と同様、やはり構造「カザリ（一つの連語）＋“的”＋カザラレ」が比較的簡単なので、一般には語順の問題はほとんど発生しない。まず、構造が複雑な固定連語から見ていこう。固定連語は構造が複雑であっても、構造が固定しているので、文法的には単語と同様に扱える。

- (19) 她不顾一切地赶往出事地点。在县医院里，她见到了不省人事的他。（『人民』96-11-85）
彼女は人目も恐れず事故が起こった町にかけつけたが、県病院で彼女を待っていた彼はすでに意識不明だった。（同上、96-11-84）
- (20) 屋子里，餐桌上早已摆好了干烧鱼、油焖大虾、清炖鸡……以及五光十色的饮料。（『人民』89-10-102）
店内のテーブルには、魚のから揚げ、大エビのいため煮、蒸したトリ……それに、とりどりの飲みものが、もう用意してあった。（同上）

下線部で示す上掲の名詞連語“不省人事的他”（例 19），“五光十色的饮料”（例 20）のカザリは、成語からなる固定連語“不省人事”“五光十色”である。固定連語はいろいろな構造と語順とがあるが、固定した表現なので、語順の問題は起こらない。次に体言や用言だけを用いる累加式や並列式の名詞連語のカザリも見ていこう。

- (21) ——阿根这狗崽子，真把我鸽子的心勾去了，鸽子爷请来胞弟老二、老三合计对策。（『人民』93-4-111）
阿根の畜生め、とうとうオレの鸽子の心を奪いやがった。爺さんは二人の弟を呼んで相談した。（同上、93-4-110）
- (22) 我睹物思情，对娘说，要不是那年的一枚硬币，我恐怕难有今日。（『人民』97-5-87）
この仕事にかかると思いだすよ。あのときコインに当たらなかったら今日の僕はなかったね。（同上）
- (23) 她自己呢？依然是单身一人。28 岁了，车间里的姑娘都说她有点儿怪，有点儿冷。（『人民』96-11-85、前出例 1）
だが彼女自身はというと、依然として独身で、もう二十八歳だった。職場の小娘たちは、陰で彼女のことをどこか変わった、冷たい女だと噂した。（同上、96-11-84）
- (24) 而且，他眼里的阿根，哪儿能比得上鸽子呢？（『人民』93-4-111）
それに爺さんの見る所では、阿根は全然鸽子にふさわしくない。（同上、93-4-110）
- (25) 每当我口中咀嚼着白暄香甜的馒头，却分明看见爹娘和弟妹吞咽玉米锅巴红薯块的情景。于是馒头变为鱼刺，哽在我的喉间。（『人民』97-5-87）
だが家では両親や弟妹がトウモロコシのお焦げやサツマイモを食べているのだと思うと、白くてふくらした饅頭が魚の骨のように喉に刺さる。（同上、97-5-86）

下線部で示す上掲の名詞連語“我鸽子的心（例 21）、那年的一枚硬币（例 22）、车间里的姑娘（例 23）、他眼里的阿根（例 24）”のカザリ（下線部）は体言性の累加式名詞連語であり、“白暄香甜的

馒头”（例 25）は用言性の並列式限定語である。前者は大小関係であり、後者は「外見＋評価」関係である。たとえば、累加式名詞連語“车间里的姑娘”（例 23）は「大“车间”＋小“里”」関係、“他眼里的阿根”（例 24）は「大“他”＋中“眼”＋小“里”」関係である。並列式限定語“白暄香甜的馒头”（例 25）は「外見“白暄”＋評価“香甜”」関係である。

体言や用言だけの累加式や並列式の限定語であれば、大小関係か、外見・評価関係からなる比較的簡単な構造なので、語順や翻訳の問題はあまり起こらない。ただ、翻訳では実質視点と話題視点という表現上の違いがある場合もあるので、話題視点からの翻訳（例 22、24）には注意した方がいいだろう。また、両者を比較すると、上掲の実例にもみられるように、累加式の限定語のほうが圧倒的に多い。

名詞連語のカザリは固定連語・累加式連語・並列式連語のほかにも説明連語「体言性の語句＋用言性の語句」と選択連語「用言性の語句＋体現性の語句」とがある。説明連語と選択連語の二組からできているこれらのカザリの語順も比較的簡単である。以下では説明連語の実例から見ていこう。

(26) 看芽儿，不像是他种的那种，那会是什么呢？（『人民』89－3－101）

芽を見ると、彼が植えたタネのものとは違う。では、なんなのだろう？（同上）

(27) 奶奶把苗苗搂得紧紧的，泪水沿着她满脸的皱纹滴在苗苗黑油油的头发上，颤巍巍地说：“好乖乖，听爸爸妈妈的话。有你这一颗心，奶奶浑身都热了。”（『人民』88－2－97）

苗苗ちゃんをギュッと抱きしめるおばあちゃん。しわくちやの顔をつたって、涙が苗苗ちゃんの真っ黒な髪の上に落ちた。「お利口さんは、パパやママの話を聞かなきゃね。その気持ちだけで、おばあちゃん、体じゅう熱くなってきちゃったよ」（同上）

(28) 他十八岁的时候，妈忽然回来一次，站在院里喊了声：“安安——”便泪流满面了。（『人民』89－7－98）

十八のとき、突然母が帰ってきて、庭に入ると涙ながらに「安安——」と呼んだ。（同上、89－7－99）

説明連語の構造は、一般には「体言性の語句＋用言性の語句」であり、体言性の語句は用言性の語句に説明され、用言性の語句は体言性の語句を説明する、という関係である。主述構造という研究者もいる。

上掲の“他种的那种”（例 26）、“苗苗黑油油的头发上”（例 27）はいずれもこの構造で、例（26）（27）は用言性の語句として動詞“他种”と重畳型の形容詞“苗苗黑油油”が用いられている。ただし、例（28）の“他十八岁⁷⁾的时候”は若干異なっている。例（28）は説明連語の述語の部分“十八岁”が、本来であれば用言性の語句を用いるべきところだが、体言性の語句（名詞連語“他十八岁”）が用いられている。これは体言性の語句が述語となっている実例であり、これも枠組み理論により、

⁷⁾ 名詞がなぜ述語になれるのかは、やはり筆者の唱える「枠組み理論」によって説明できる。中国語は形態変化が乏しいので、述語の位置に体言性の語句が用いられても枠組みの有する機能により、用言性の意味が加わるからである。

なぜ体言性の語句が述語になれるのかを説明できる。

次に選択連語「用言性の語句+体現性の語句」がカザリとなっている実例を見て検討してみよう。

- (29) 安安独自一人，没有家底，到了说媳妇的年龄，却没有人与他说合。(『人民』89-7-99)
安安はひとりぼっち、財産などはない、嫁の話が出る年齢になったが、誰も世話をしてくれない。(同上)
- (30) 从此，她承担起了照顾他们娘俩的责任。(『人民』96-11-85)
その後、彼女はこの親子の世話を一手に引き受けた。(同上)
- (31) 可她无法坚强，支撑了几年的信念在这一刻骤然断裂。(『人民』96-11-85)
だが彼女は強くなかなかねなかった。何年もの間ひたすら支えにしてきた信念がこの瞬間、音を立てて崩れたのだ。(同上、96-11-84)
- (32) 到了该恋爱的年龄就相爱了。(『人民』96-11-85)
そして年頃になると自然に愛し合うようになった。(同上、96-11-84)

選択連語の構造は「用言性の語句+体言性の語句」であり、例(29)から(32)のカザリとしての限定語“说媳妇”“照顾他们娘俩”“支撑了几年”“该恋爱”は、用言性の語句“说、照顾、支撑、该”が体言性の語句“媳妇、他们娘俩、几年⁸⁾、恋爱⁹⁾”を選択する関係である。このグループに属する連語の構造は、この関係があるので選択連語と名付けている。

2.2. 数量詞の加わる複雑な構造の限定語(カザリ)

上掲の単語や連語に、下記の実例に見られるような数量詞が加わると、かなり複雑なカザリ¹⁰⁾となる。まず単語の前に数量詞の加わる実例から見ていこう。累加式も並列式の連語も基本的な構造は同じなので、このグループの中に入れる。この構造では数量詞が言語環境によって、数詞が省略され量詞だけを用いる場合(例36)もある。

- (33) “是我。”一只有力的大手握住了她的手。(『人民』91-2-96)
「おれだよ」力のある大きな手が、彼女の手を握った。(同上、91-2-97)
- (34) 他想起一句很有名的话：只要心诚，石头也会开出花来。(『人民』89-3-101)
彼は有名な言葉を思い出した。「真心があれば、石でも花をひらくことができる」。(同上、89-3-101~102)
- (35) 船舱里三个年迈的渔夫铁青着脸，无声地抽烟；阿根和鸽子坐在船板上、互相用眼睛传递着惶恐。(『人民』93-4-111)
船室では三人の老いた漁師が青黒い顔をして黙々とタバコを吸っている。阿根と鸽子は

⁸⁾ 一般に“支撑了几年(的信念)”の“几年”は補語とみなす研究者が多いが、筆者は補語を機能性と状態性の2類としているので、“几年”は補語ではなく時間客語とみなす。

⁹⁾ “恋爱”は一般には動詞とみなされているが、選択連語のなかでは転成名詞としての役割を果たしている。

¹⁰⁾ 徐昌火(2005:p.373~380)では多項性限定語について限定語の種類を分類し詳述しているが、さらに簡単に分かりやすく説明する必要があるだろう。

船板に腰かけて不安の目を見かわしている。(同上、93 - 4 - 110)

- (36) 体校的老师看上了他。说他是块柔道运动员的好材料，好好培养，大有希望。(『人民』88 - 7 - 101)

体育学校の教師が目をつけて、この子は柔道の選手に向いている、うまく育て上げれば大いに希望があるといっている。(同上)

- (37) 土里埋进了一个小小的欺骗。(『人民』89 - 3 - 100)

こうして、土の中に小さな小さなウソが埋められてしまった。(同上、89 - 3 - 101)

- (38) 身边，沁沁一张纯真的、快活的脸蛋。(『人民』89 - 3 - 101)

そばにいるシンシンは、純真で快活な子だ。(同上、89 - 3 - 102)

実詞は体言性と用言性の品詞に分けられる。限定語(カザリ)が体言性と用言性の語句に分けられる場合の語順は、一見すると複雑だが、その語順は「体言性の語句+用言性の語句」である。

名詞連語が、カザリとなる体言性の語句と、カザラレとなる体言性の語句との関係であれば、両者は一般に関係性を表すだけなので、連語論では「関係的なむすびつき」という。一方、カザリとなる用言性の語句は、カザラレとなる核を規定するので、必ずその前に用いられる。これを「規定的なむすびつき」という。むすびつきを作るこれらの関係により、名詞連語の語順は、それが複雑であっても「体言性の語句+用言性の語句+“的”+体言性の語句」となる。

例(33)の名詞連語“一只有力的大手”も、この関係により作られている。たとえば、例(33)の構造は「体言性の語句“一只”+用言性の語句“有力”+“的”+体言性の語句“大手”」の語順である。例(34)の“一句很有名的话”は、この構造の用言性の語句“有名”の前に副詞“很”が加わっただけである。例(35)の“船舱里三个年近的渔夫”は、この構造に状況語“船舱里”が加わっただけである。例(36)の名詞連語“块柔道运动员的好材料”は、“柔道运动员”が“好材料”を規定しているので、その前に用いられている。例(37)の“一个小小的欺骗”は用言性の語句が形容詞の重ね型“小小”、例(38)の“沁沁一张纯真的、快活的脸蛋”は用言性の語句が形容詞の並列式“纯真的、快活”である。いずれもこの構造の語順である。なお、数量詞は以下の実例に見られるように、カザラレが体言性の語句でできている場合、カザラレの中の限定語となる場合もある。

- (39) 吕月没毕业就考上了美国的一所大学，当然还是学医。(『人民』94 - 10 - 97)

呂月は、大学卒業前にアメリカのさる大学に受かった。(同上)

- (40) 这是三口人的一个小家。(『人民』97 - 2 - 87)

これが彼ら親子三人の住まいだった。(同上、97 - 2 - 86)

例(39)の“美国的一所大学”、例(40)の“三口人的一个小家”はいずれも数量詞がカザラレの中の限定語になっている場合である。この用法は数量詞をカザラレの中の限定語とすることにより、カザリ“美国、三口人”を強調する用法¹¹⁾である。

¹¹⁾ 高橋弥守彦(2006: 272~276)では、ある文法単位の中であれば、前に来る単語ほど後の単語に対して影響力があるとしている。これを影響力前置のルールと言っている。

以下は、説明連語あるいは選択連語の前に数量詞が加わるカザリとなる構造がやや複雑な実例である。まず「数量詞+説明連語+“的”+カザラレ」の構造で作る名詞連語から見ていこう。

- (41) 一个身材瘦削的男青年正在招牌下伫立着往街道东张西望。(『人民』89-10-101)

やせた若い男がその下にジッと立って通りをあちこち見ている。(同上)

説明連語が用言性の連語なので、名詞連語の語順はやはり「体言性の語句+用言性の語句+“的”+体言性の語句」となる。たとえば、例(41)は「体言性の語句“一个”+用言性の語句“身材瘦削”+“的”+名詞連語“男青年”」となる。以下では、「数量詞+選択連語+“的”+カザラレ」からなる名詞連語も見ていこう。

- (42) 那女人掏出一个盖有公章的介绍信说：“是真的，这信就是介绍俺和你结婚的。”(『人民』89-7-99)

女は公印の押しである紹介状をとり出した。「ほんとです。これがわたしの今度の結婚紹介状」(同上)

- (43) 忽然隐约听到窗外的咳嗽声，他凭窗望去，外边早已纷纷扬扬下起鹅毛大雪，雪中一个穿着棉大衣、戴着大口罩的人，周身皆白，成了个雪人啦！(『人民』97-2-87)

ふと気が付くと、窓のそとから微かに咳をするらしい音が聞こえてくる。元元は大急ぎで窓際にかけて寄り、手すりに寄り掛かるようにして外を覗くと、もう家の外は銀一色で、真っ白なぼたん雪こんこんと降りしきっていたが、その雪の中に、綿入れのオーバーを着て大きなマスクをした一人の男が、雪だるまのように立っていた。(同上)

- (44) 在一个刚做母亲就失去了丈夫的人面前，在一个刚做儿子就失去了父亲的人面前，她不再是娇弱的牵牛花，而变成一棵树。(『人民』96-11-85)

母親になったばかりで夫を亡くした女性の前で、生まれてすぐ父親を失った赤ん坊の前で、彼女はこれまでの弱弱しい朝顔ではなく、たくましい樹に変わっていたのだ。(同上)

例(42)の“一个盖有公章的介绍信”の構造は「体言“一个”+用言“盖有公章”+“的”+カザラレ名詞“介绍信”」、例(43)の“雪中一个穿着棉大衣、戴着大口罩的人”の構造は「体言“雪中”+体言“一个”+用言“穿着棉大衣、戴着大口罩”+“的”+カザラレ名詞“人”」、例(44)の“一个刚做母亲就失去了丈夫的人面前”の構造は「体言“一个”+用言(継起式選択連語)“刚做母亲就失去了丈夫”+“的”+カザラレ名詞連語“人面前”」であり、同例文中の“一个刚做儿子就失去了父亲的人面前”も同様の構造である。なお、「数量詞+選択連語+“的”+カザラレ」の構造は、以下のように「代詞+量詞+選択連語/形容詞+“的”+カザラレ」構造となる場合もある。

- (45) 看见她时，那双无神的眼睛闪出光亮。(『人民』96-11-85)

彼女の顔を見た瞬間、どんよりしていた彼の目がちらっと輝いた。(同上、96-11-84)

- (46) 元元临近期末，功课紧、作业多，他在这个温暖、宁静的小屋里，埋在作业堆中，不知不觉夜渐深了，他的作业也才作完。(『人民』97-2-87)

期末テストを間近に控えて勉強は追い込みに入っており、宿題も多かったから、暖房のきいた静かな家で勉強に熱中しているとついつい時間を忘れ、いつの間にか深夜になっ

てしまった。やっとこの日の予定を終わって一息いれた時だった。(同上)

- (47) 无声的雪花，如银如絮，立刻盖住了这对拥抱着的父子。(『人民』97 - 2 - 87)

銀のような綿のような雪が音もなく降ってきて、抱き合った父子をたちまち包み込んだ。
(同上)

例(45)の“那双无神的眼睛”の構造は「体言性の語句“那双”+用言性の語句“无神”+“的”+カザラレ名詞“眼睛”」、例(46)の“这个温暖、宁静的小屋里”の構造は「体言“这个”+用言“温暖、宁静”+“的”+カザラレ方位詞連語“小屋里”」、例(47)の“这对拥抱着的父子”の構造は「体言“这对”+用言“拥抱着”+“的”+カザラレ名詞“父子”」である。このほか、限定語があまり長くなると、リズムが悪くなるので、限定語を後置することもある¹²⁾。たとえば、次の文である。

- (48) 姥姥有一副绿玉手镯，是祖上传下来的。(『人民』91 - 2 - 96)

祖母は緑玉の腕輪を持っている。先祖代々のものだ。(同上)

例(48)の“是祖上传下来的”は前の分文の中に用い、“姥姥有一副祖上传下来的绿玉手镯。”とも言える。この表現は限定語が長くなりリズムカルではなくなるので、原文は中国語の「対の文化」に沿って“是祖上传下来的”を後置することによりリズムカルにしている。しかし、日本語訳は原文に沿って「祖母は緑玉の腕輪を持っている。先祖代々のものだ。」と訳すより、語順を若干かえて「祖母は先祖伝来の緑玉の腕輪を持っている。」と表現する方が、構造「主語+目的語+述語」が単純になりリズムカルになる。ここには中日両言語のそれぞれの特色が出ている。

次に、名詞連語のなかに構造助詞“的”が二回使われている複雑な構造になっている事例も見ていこう。

- (49) 只是那块从先天带下来的铜钱大小的胎记，无情地印在她的额头上，使她在姑娘群里黯然失色了。(『人民』91 - 2 - 96)

ただ、額に無常ともいうように生まれつきついている銅銭大のシミが、他の娘たちといっしょにいと、彼女を暗い存在にしてしまう。(同上)

- (50) 当他把那几颗晶莹的种子下到两只精致的花盆的时候，小女儿沁沁跑了过来，嚷着也要种花。(『人民』89 - 3 - 100)

二つのきれいな植木鉢に、透明で光り輝くタネを埋めていたときのことだ。娘のシンシンが走って来て、わたしも植えるんだといっけかない。(同上)

例(49)の“那块从先天带下来的铜钱大小的胎记”の構造は、“那块从先天带下来的铜钱大小+的+胎记”であり、“那块从先天带下来的铜钱大小”が構造助詞“的”を用いて“胎记”をカザッテ

¹²⁾ 中国語は原文“姥姥有一副绿玉手镯，是祖上传下来的。”と修正文“姥姥有一副祖上传下来的绿玉手镯。”を比較すると、原文のほうが明らかにリズムカルである。原文は“是祖上传下来的”を後置することにより、複文がリズムカルになっているが、修正文は述語“有”と客語“(一副祖上传下来的绿玉)手镯”との関係が長すぎて冗漫さを感じる。また、構造的にも分かりにくくなる。それに対し、日本語の訳文は、原文「祖母は緑玉の腕輪を持っている。先祖代々のものだ。」の表現は、「先祖代々のものだ。」を強調する表現であり、一般には「祖母は先祖伝来の緑玉の腕輪を持っている。」と表現する。日本語は目的語「腕輪を」と述語「持っている」との関係が隣接し明らかなので、連体修飾語が長くなっても分かりやすい。

いる。“那块从先天带下来的铜钱大小”の構造は、“那块+从先天带下来的+铜钱大小”であり、「体言性の語句“那块”+用言性の語句“从先天带下来”+“的”+名詞連語“铜钱大小”(カザラレ)」である。例(50)の“两只精致的花盆的时候”の構造も“两只精致的花盆+的+时候”であり、“两只精致的花盆”の構造は、「体言性の語句“两只”+用言性の形容詞“精致”+“的”+名詞“花盆”(カザラレ)」である。

3. 名詞連語における日本語訳

名詞連語の構造は、連語論の観点からみれば、「カザリ+“的”+カザラレ」である。カザリが単項性語句であっても、多項性限定語であっても、日本語訳には語順に関する日本語の規則があるので、語順に関する日本語の規則を掴んでいなければならない。中国語の語順で訳すと、訳が分かりにくくなる場合もでてくる。まず、カザリが1単語の場合から見ていこう。

- (51) 对一个观棋的中年男子说：“走吧！元元的作业写完了。”(『人民』97-2-87)
将棋を見ていた一人の中年男性の肩にそっと掛けながら言った。「あなた、もういいわよ、元元の宿題終わったわ」(同上、97-2-86)
- (52) 父亲的精神居然好了起来，有一天对吕星说：“老这么闲着，饭馆里的事我也干点儿吧。(『人民』94-10-97)
意外や父も精神的に元気になって、ある日呂星に言った。「いつもひまだから、私も少し食堂を手伝おう」。(同上、94-10-96)
- (53) 安安问他女人怎么知道他的名字，为啥要跟他过日子？那女人笑而不答。(『人民』89-7-99)
安安は女に、なんでオレの名前を知ったのか、なんでオレといっしょに暮らしたいのかときいた。女は笑って答えない。(同上、89-7-100)
- (54) “恩人：我代表孩子和他死去的母亲，向你磕头！你温情善良多像他的妈妈，我……”(『人民』91-2-97)
「命の恩人様 子供と亡くなった母を代表して、あなたに心よりお礼申し上げます。あなたは心暖かく、善良で、子どもの母親のようです。私は……」(同上)

例(51)から(54)まではカザリが1単語の体言性の単語“元元的作业”[元元の宿題]、“父亲的精神”[父も精神的に]、“他的名字”[オレの名前を]、“他的妈妈”[子供の母親の]だが、訳

¹²⁾ 中国語は原文“姥姥有一副绿玉手镯，是祖上传下来的。”と修正文“姥姥有一副祖上传下来的绿玉手镯。”を比較すると、原文のほうが明らかにリズムカルである。原文は“是祖上传下来的”を後置することにより、複文がリズムカルになっているが、修正文は述語“有”と客語“(一副祖上传下来的绿玉)手镯”との関係が長すぎて冗漫さを感じる。また、構造的にも分かりにくくなる。それに対し、日本語の訳文は、原文[祖母は绿玉の腕輪を持っている。先祖代々のものだ。]の表現は、[先祖代々のものだ。]を強調する表現であり、一般には[祖母は先祖伝来の绿玉の腕輪を持っている。]と表現する。日本語は目的語[腕輪を]と述語[持っている]との関係が隣接し明らかなので、連体修飾語が長くなっても分かりやすい。

出法はそれぞれ異なっている。いずれも正しい訳だが、このタイプの名詞連語は、段落の最初に現れれば例(52)、2回目以降であれば例(51)の訳出法が一般的である。例(53)は言語環境(文頭の“安安”)によって、“他”を[オレの、自分の]と訳す場合¹³⁾であり、例(54)も言語環境(前の文の“孩子”)によっての訳出法である。筆者はこれを話題視点からの訳と読んでいる。

筆者は品詞から分類する3類の連語「名詞連語、動詞連語、形容詞連語」をカザリ(限定語)の構造から、累加連語、並列連語、説明連語、選択連語の4類に大別する。紙幅の関係上、累加連語、並列連語は、カザラレのところで説明した語順と同じなので、ここでは説明連語と選択連語がカザリとなる場合の実例を見てみよう。

- (55) 当她走下火车, 重新回到他们从小在一起生活的城市时, 她的心里只剩下绝望。(『人民』96-11-85)

列車を降りて、小さいころから彼といっしょに住んだこの町に再び帰ってきたとき、彼女は絶望していた。(同上)

- (56) 坐在教室里, 我神情恍惚, 眼前老是晃动着娘憔悴的身影。(『人民』97-5-87)

教室に座っているとポーッととして、いつも目の前におふくろの疲れた姿が浮かんでくる。(同上、97-5-86)

- (57) 秋天, 一纸大学录取通知书飞进我们这个农家小院, 娘多年来灰暗的脸上绽开春阳般灿烂的笑意。(『人民』97-5-87)

この秋、一枚の大学合格通知書がこの田舎家に舞い込んだ。長い間晴れ間の見えなかったおふくろの顔に、春のような明るい笑顔がよみがえった。(同上)

例(55)(56)(57)は説明連語「体言性の語句+用言性の語句(+“的”+体言性の語句)」「他们从小在一起生活的城市」[小さいころから彼といっしょに住んだこの町に]、“娘憔悴的身影”[おふくろの疲れた姿が]、“娘多年来灰暗的脸上”[長い間晴れ間の見えなかったおふくろの顔に]がカザリとなっている場合である。例(55)は説明連語を作る用言(動詞)“生活”の前に他の語句“从小在一起”が入り、例(57)も用言(形容詞)の前に他の語句“多年来”が入っているため、このタイプの構造を拡大説明連語と名付ける。

例(55)は複文の主体が“她”なので、複文中の説明連語“他们从小在一起生活的城市”[小さいころから彼といっしょに住んだ]も、それに倣って訳されている。名訳中の名訳といえる。さもないならば、一般には[二人が小さいころからいっしょに住んだ]と訳すであろう。これでは複文の主体がやや曖昧になる。例(56)と(57)の限定語の構造「名詞+形容詞」は、基本的には(55)と同じ構造である。ただ(57)には名詞連語“多年来”が加わっている。日本語訳は、前者の訳[おふくろの疲れた+姿が]は中国語の語順に沿って訳されているが、後者の訳[長い間晴れ間の見えなかった+おふくろの顔に]は「用言+体言」になっている。このように訳すのは、構造が単純に

¹³⁾ 高橋弥守彦(2020)の「実質視点と話題視点」(p.55~74)の63頁に“他”の訳が整理してある。この訳[オレの、自分の]はその中の一つである。

なり分かりやすくなるからである。

これらはいずれも「疲れたおふくろの姿が」「おふくろの長い間晴れ間の見えなかった顔に」とも訳せる。中国語の語順通りに訳す「おふくろの疲れた姿が」「おふくろの長い間晴れ間の見えなかった顔に」は、前者は「おふくろ」と「姿」、後者は「おふくろ」と「顔」とが離れてしまうので、まとまり性の面では分かりにくくなる。それに対し「疲れたおふくろの姿が」「長い間晴れ間の見えなかったおふくろの顔に」は、前者は「おふくろ」と「姿」、後者は「おふくろ」と「顔」とが隣接しているので、日本語としてのまとまり性の面から見ると分かりやすい。それゆえ、日本語訳としてはこちらのほうが優れていると言える。次にさらに複雑な名詞連語がカザリとなる場合を見てみよう。

- (58) 回忆起千军万马争过独木桥的情景, 我不禁一阵颤栗。我说我不试了。(『人民』97 - 5 - 87)

だが大勢の受験生が、細い丸木橋を我がちに渡ろうと揉み合うさまを思うと、僕は背筋が寒くなる。(同上、97 - 5 - 86)

- (59) 望着娘充满希冀的目光, 我不敢再强硬, 只得接过娘递来的一叠浸透着汗渍的纸钞, 又回到县高宽敞明亮的教室里复读。(『人民』97 - 5 - 87)

期待しているんだよ、という目つきにそれ以上は逆らえず、おふくろは差し出す汗の滲んだ札束を受け取って、再度受験勉強をしなおすため、県立高校の広くて明るい教室に戻ってきた。(同上、97 - 5 - 86)

- (60) “咯嘣”，我咬着一样硬物，吐出来，竟是昨夜我包进饺子里的那枚硬币。(『人民』97 - 5 - 87)

「ガチ」と何か硬いものが歯に当たった。出してみると、なんと前の晩僕がギョウザに入れたコインじゃないか。(同上)

例(58)(59)(60)は名詞連語のカザリが説明連語「体言+用言+ (“的”+体言)」「千军万马争过独木桥的情景」「大勢の受験生が、細い丸木橋を我がちに渡ろうと」、「娘充满希冀(的目光)」「期待しているんだよ」、「昨夜我包进饺子里的那枚硬币」「前の晩僕がギョウザに入れた」の場合である。これらの構造は一見すると、かなり複雑な構造に見えるが、例(55)から(57)の名詞連語はカザリとしての説明連語「名詞+動詞/形容詞」に客体が加わっただけの文法単位なので、分析してみると、さほど複雑ではない。

ここで、選択連語「動詞+名詞」が名詞連語のカザリとなっている名詞連語で作る文も、以下で見てみよう。

- (61) 这几年, 村上做生意的人多起来。安安不善言语, 就在村上干起了屠夫。(『人民』89 - 7 - 99)

最近の何年間は、村にも商売などをするものが増えてきたが、口下手な安安は、村の屠殺夫になっている。(同上)

- (62) 可他却为未来还没影的儿子买了架钢琴。(『人民』88 - 7 - 100)

それでも、まだ見ぬ未来の息子のためにピアノを買いこんだ。(同上)

- (63) 一晃又是几年，安安也快小四十的人了，仍是光棍一条。(『人民』89 - 7 - 99)

いつの間にかまた何年か過ぎ、安安はそろそろ四十になるが、相変わらずひとり者だ。
(同上)

例 (61) (62) (63) はカザリが選択連語「用言“做、没、小”+体言“生意、影、四十”」で作る名詞連語“村上做生意的人”[村にも商売などをするものが]、“未来还没影的儿子”[まだ見ぬ未来の息子]、“也快小四十的人”[そろそろ四十になる]の場合である。これらは、一見すると複雑な構造に見えるが、いずれもプラスアルファ“村上、未来还、也快”が、選択連語“做生意、没影、小四十”の前に用いられているだけであり、中日両言語の構造は、それぞれの言語の語順に照らせば、基本的には対応している。ただし、例 (62) の“未来还没影的儿子”[まだ見ぬ未来の息子]は[未来のまだ見ぬ息子]とも言えるので、日本語の語順には注意が必要である。名詞が隣接する「未来の息子」と訳されている例 (62) の訳文の方が優れている。また、例 (63) の“也快小四十的人了”[そろそろ四十になるが]は形容詞“小”が数詞“四十”の前にあるので、この組み合わせにも注意が必要であろう。

最後に体言性語句の前に数量詞の入る多項性限定語の場合を見てみよう。まずカザリが単純な構造「数量詞+形容詞」からみていこう。

- (64) “星海”钢琴蒙上一层厚厚的灰，琴后身儿还生了锈。(『人民』88 - 7 - 101)

「星海」のピアノには厚いほこりが積もってしまった。(同上)

- (65) 土里埋进了一个小小的欺骗。(『人民』89 - 3 - 100)

こうして、土の中に小さな小さなウソが埋められてしまった。(同上、89 - 3 - 101)

- (66) 弟骑着一辆旧自行车，驮着两袋黄灿灿的小麦，给我送到学校面粉厂。(『人民』97 - 5 - 87)

弟がオンボロ自転車に粒よりの小麦を二袋も積んで、学校の製粉場に届けてくれた。(同上、97 - 5 - 86)

例 (64) (65) の名詞連語“一层厚厚的灰”[厚いほこり]、“一个小小的欺骗”[小さな小さなウソが]は、中国語には数量詞があるが、日本語では減訳されている。しかし、例 (66) の“两袋黄灿灿的小麦”[粒よりの小麦を二袋も]は中国語も日本語も数量詞がある。名詞連語の構造「体言+用言+“的”+カザラレ」は数量詞がないと、数量が分からないが、日本語では数量詞が単体の場合は形容詞や動詞(用言性の語句)によって、カザラレが規定され、特定化されるので、減訳される。しかし複数になると数量を明らかにする必要があるので、中日両言語とも減訳できない。次にカザリがやや複雑な構造「数量詞+連語」を見てみよう。

- (67) 大年初一，娘把一碗热气腾腾的饺子端到我们面前。(『人民』97 - 5 - 87)

元日の朝、おふくろが湯気の立っているギョウザのお碗を目の前に運んでくれた。(同上)

- (68) 一个身材瘦削的男青年正在招牌下伫立着往街道东张西望。(『人民』89 - 10 - 101)

やせた若い男がその下にジッと立って通りをあちこち見ている。(同上)

- (69) 那女人掏出一个盖有公章的介绍信说：“是真的，这信就是介绍俺和你结婚的。”（『人民』89 - 7 - 99）

女は公印の押してある紹介状をとり出した。「ほんとです。これがわたしの今度の結婚紹介状」（同上）

- (70) 他随手拣了颗酷似花种的小鹅卵石，在沁沁亲他脖子喊着“爸爸好”的喜悦中，极认真地放进盆中，让沁沁亲手培上土，浇了水。（『人民』89 - 3 - 100）

彼はその間、花のタネに似た丸く小さな石をひろって、真面目くさって鉢のなかに入れた。首にキスをしては、「パパ、いい人」と叫ぶシンシンは、うれしくてしかたがない。そして、土をかけ、水をかけさせてあげた。（同上）

例(67)の名詞連語“一碗热气腾腾的饺子”と(68)の“一个身材瘦削的男青年”とは、構造がやや複雑だが、ともに「数量詞(体言) + 説明連語(用言) + “的” + カザラレ」であり、基本的な構造は例(64)(65)(66)と同様である。例(69)(70)は「数量詞(体言) + 選択連語(用言) + “的” + カザラレ」で、例(67)(68)に用いられている説明連語が選択連語になっているだけで、名詞連語全体としての構造は同様である。

これらの名詞連語も数量詞の個数が単体であれば、数量詞の後に用いられている説明連語や選択連語によってカザラレが規定化され、特定化されるので、やはり減訳される。なお、名詞連語の中で数量詞が一番前に用いられているのは「数量詞 + カザラレ」が関係的なむすびつきで、「選択連語/説明連語 + カザラレ」が規定的なむすびつきだからである。規定的なむすびつきはカザラレを規定するので、カザラレの前に用いられる。次に数量詞がカザラレに用いられている場合を見てみよう。

- (71) 我睹物思情，对娘说，要不是那年的一枚硬币，我恐怕难有今日。（『人民』97 - 5 - 87）

この仕事にかかると思いますよ。あのときコインに当たらなかつたら今日の僕はなかつたね。（同上）

- (72) 阿根舍命从船舷上抢到仅剩的两个救生圈：一个塞给鸽子，一个给鸽子爷。（『人民』93 - 4 - 111）

阿根が危険をおかして船べりに残った二つの救命ブイを引きちぎった。一つを鸽子にかぶせ、一つを鸽子の爺さんに渡す。（同上、93 - 4 - 110）

- (73) 后来，花儿风流过了，便结了果实，绒绒的一个小球，帽子似地顶在头上，好漂亮好漂亮！（『人民』89 - 3 - 102）

その後、花盛りは過ぎてしまったが、絨毛の小さなボール状の実をつけた。帽子のように茎の頭にのせて、たいへんきれいだ。（同上）

例(71)の名詞連語“那年的一枚硬币”[あの時コインに]、例(72)の“仅剩的两个救生圈”[残った二つの救命ブイを]、例(73)の“绒绒的一个小球”[絨毛の小さなボール状]の原文は、3例ともカザラレの前に数量詞がある。

例(71)の訳文は数詞が[-]の数量詞[一枚]“一枚”なので、訳文の中で特定化されるので、

数量詞が単体の場合は、意味的な重複を避けやはり減訳される。例(72)は数量詞が複数なので、数量を現す必要があり訳されている。例(73)も数量詞が単体の場合なので、やはり減訳されている。

4. おわりに

名詞連語の構造「カザリ+“的”+カザラレ」は、カザリとカザラレとがいずれも複雑になる場合もあるが、カザラレの基本は名詞(例1)である。動詞(例2)や形容詞(例3)、あるいはそれらを用いて作る連語(例13)がカザラレとなる場合もあるが、筆者の唱える枠組み理論に基づけば、名詞連語のなかで、用言性の語句で作るカザラレには体言的な意味が加味され、文法的には転成名詞あるいは転成名詞連語とみなせる。また、カザラレが体言で作られる名詞連語(例7、8)の場合もあるが、これは関係的なむすびつきから作られている。

名詞連語はカザリが体言性の語句や用言性の語句だけの場合もある。カザリが体言性の語句(例24)だけであれば、カザリとカザラレの関係はやはり「関係的なむすびつき」であり、カザリが用言性の語句(例25)だけであれば、カザリがカザラレを規定する「規定的なむすびつき」である。

名詞連語はカザリが複雑になっても、用言性の語句であればカザラレを規定するので、必ずその前に用いられる。体言性の語句と用言性の語句のある複雑な名詞連語(例41)(42)であっても、原則は「体言性の語句+用言性の語句+“的”+カザラレ」の語順となる。数量詞が一番前に用いられる名詞連語もカザラレとともに関係的なむすびつきを作るからである。ただし、カザリを強調する場合は、数量詞をカザラレのほうに持っていく用法(例39)(40)もある。

中文日訳をする場合は、中国語が表意文字で、日本語が表音文字である特徴をとらえる必要がある。複雑な中国語の連語を日本語に訳す場合、日本語としての規則に則った分かりやすい日本語の語順に沿った構造にして、意味とリズムの一致する分かりやすい自然な日本語となるよう推敲する方がいだろう。

言語資料

1. 『人民中国』 ショートショート 人民中国雑誌社 1988～1997
2. 『人民中国』 楽らく対訳 人民中国雑誌社 2014～2017
3. 『人民中国』 ショートショート 人民中国雑誌社 2018～

参考文献

日本語文献

1. 荒川清秀(2015)『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社
2. 鈴木康之(2000)『日本語学の常識』海山文化研究所
3. 鈴木康之(2011)『現代日本語の連語論』日本語文法研究会
4. 朱徳熙著 杉村博文・木村英樹訳(1995)『文法講義』白帝社

5. 高橋弥守彦(2006)『实用詳解中国語文法』郁文堂
6. —————(2017)『中日対照言語学概論—その発想と表現—』日本僑報社
7. —————(2020)『中日翻译学的基础与构思—从共生到共创』外语教学与研究出版社
8. 中野道雄(1994)『翻訳を考える—日本語の世界・英語の世界』三省堂
9. 松村達夫(1978)『翻訳の論理 英語から日本語へ』玉川大学出版部
10. 李臨定著／宮田一郎訳(1993)『中国語文法概論』光生館

中国語文献

1. 丁崇明(2009)《现代汉语语法教程》北京大学出版社
2. 耿二岭(2010)《汉语语法》北京语言大学出版社
3. 卢福波(2011)《对外汉语教学实用语法》北京语言大学出版社
4. 陆庆和(2006)《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社
5. 单宝顺(2011)《现代汉语处所宾语研究》中社会科学出版社
6. 徐昌火编著 张媛英译(2005)《征服 HSK 汉语语法》北京大学出版社
7. 杨德峰(2004)《汉语的结构和句子研究》教育科学出版社
8. 杨玉玲(2021)《日汉定语标记对比研究》学苑出版社